

1. テキスト

「内部知覚について」97 頁 5 行目から 99 頁 8 行目まで

2. テキスト要約

西田は真実在（ウーシア）を基体（ヒュポケイメノン）であるとし、**基体**とは「何処までも判断の主語となって、述語とはならないもの」であり、即ち「一あって二なき**個物**」であるとして捉えている。これに対して、「**一般的なるもの**」は「此物が重い」「此物が赤い」といった文における「赤い」「重い」というような、「此物」（個物）について語られる一般概念である。

「此物」のような**個体概念の根柢**には、論理で捉えられない「**実在・個物**」の「**直覚**」が常にある。つまり、我々が思惟によって、「或一つの物について、その性質を判断していく時、その物の直覚が基礎となって居なければならない」ということである。普通に我々が物の概念の成立には、「時空の上における種々なる感覺的性質の間に**不変なる関係**」を見なければならないと考えている。このような種々なる感覺的性質の統一としての「**不変なる関係**」は、例えば「正三角形はすべての辺の長さが等しい」といった時空を超えた**一般概念**（「一般的なるもの」）のようなものだと思われる。しかし、このような**一般概念の根柢**には「**直覚せられたもの**」即ち「**実在・個物**」の「**直覚**」がなければならない。それが思惟によって捉えられず、真に時空を繋げており、時空を超えた統一である。**一般概念はこの統一を思惟によって抽象化・普遍化されたものであり、「考えられたもの」にすぎない**と考えられる。このように、「**思惟**」（及びそれより得た感覺的性質）は「**直覚**」に比べれば、**次位的なもの**であろう。

我々が「**主語・個物・実在**」となすものはこの統一であり、「**述語・一般的なるもの・不変的關係**」となすものはその統一についての「**種々の属性**」である。しかも、先述したように述語となる一般概念の根柢には「**実在**」の「**直覚**」（統一）があるため、種々な「**属性・述語**」の根柢にはそれらを結合し、それらを超えた統一（**直覚**）・「**主語**」がなければならないと考えられる。

こうして、主語となって述語とならない「**基体**」とは**無限なる属性・述語を統一するもの**である。種々な属性例えば「暑い」といった感覺的性質は、**判断作用・思惟の作用によって得られたものである**ため、「**基体**」とは「**無限なる判断を統一するもの**」であるとされる。そして、「**判断と判断を統一する**」「**基体**」は、**判断（思惟）を超えたものでなければならない**。我々が判断作用（思惟作用）をもって、対象化することができない「**基体**」をどこまでも志向しようとしても、**絶望・躓き**を体験せざるを得ない。「**基体**」は反省的思惟が崩れるところで出会う「**直覚的**」なものである。そのゆえ、**基体の根柢には、「対象化することができない作用の作用の立場」即ち自覚・直覚の立場**がなければならないと考えられる。

このように、「**作用の作用の立場**」は「**思惟（作用）を超越せる立場**」にほかならない。感覺的性質とか、単なる質料とか、単なる形相などは反省的思惟による「**単に一般的なるもの**」にすぎなく、それらは物についての「**種々の性質**」・述語であると考えられる。形相と質料の根柢に**両者を結合する統一・「直覚」**がなければならない、これこそ**主語となる基体・個物**であるといえよう。しかし、主語となる個物は**単に種々の「属性（述語）の結合」**ではない。反省的思惟によって、種々の「**属性の結合**」とされた物はどこまでも分析し尽くすことのできるものである。ところが、**反省的思惟に対して達すべからざるもの・分析し尽くせないもの**がある。それこそ**真の個物**であり、**真の個物は「思惟を超越せる立場に基かねならぬ」とされる**。それで、個物の根柢にある「**直覚**」の統一作用は思惟の統一作用を超越したものであると考えられて、これが「**直覚・自覚**」が「**作用の作用**」と呼ばれる所以であろう。

また、西田によれば、質料が可能であり、形相が現実であって、形相と質料の結合は「**連続せる一つの作用でなければならない**」。「**作用の作用**」である「**直覚**」は「**連続せる一つの作用**」のようなもの即ち「**連続的統一**」、「**作用の連続**」にほかならない。西田が「**限なき述語の主語となる本体（実在・基体・個物）**」とは、形相でもなく、質料でもなく、「**発展的個体**」、「**作用の連続**」としている。思惟作用を超越し、思惟作用（述語）を無限に結合する「**直覚**」が「**基体**」の基にあると考えられる。これによって「**超越的な基体**」が成立するとされる。

さらに、西田は「**判断（思惟）と直覚**」との関係を考察した。判断と直覚とは普通に思われるように異なるものではなく、「**如何なる判断の基にも直覚がなければならぬ**」ない。物の色を「赤」と判断した時、我々は「赤というもの」を直観するのであり、物を離れて「赤其者」を見るのである。その場合、**抽象すること（判断・思惟）は他方で直観すること**であると考えられる。そして、赤の直観は判断を超えたものであって、判断せられるかどうかに関係せず、「**赤は赤である**」という「**直覚**」が常にあり、つまり「**赤は赤自身に同一**」である。赤の直覚を判断の形に現すと、**自同的判断**になる。そこで、**直覚と思惟（判断）との結合**が見られる。それでは、「**述語としての赤**」（この色は赤であるところの赤）と「**自同的赤**」（主語としての赤、自覚的赤）とはどのような関係

にあるか。

3. 哲学的問い：反省・主観が破られて、客観・神と一体になった後、意識的構造としての人間は反省・主観的な状態に必ず戻る。人生は無意味の繰り返し・永劫回帰ではないか。その場合、内在的超越は如何に可能なのか。唐露記